

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770002

研究課題名(和文)デカルトによる批判的受容を背景にしたピエール・シャロン人間学に関する哲学史的解明

研究課題名(英文)Descartes's Critical Reception of Pierre Charron's Anthropological Thoughts: its Historical & Philosophical Perspectives

研究代表者

津崎 良典(TSUZAKI, Yoshinori)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10624661

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人間学(政治論的/道徳論的)に関して[1]デカルトによるシャロン哲学の受容と変更の機構を解明し、[2]その批判的受容を基点にシャロン哲学のフランス哲学史における意義を剔抉すると同時に、[3]フランス哲学黎明期における人間学的考察の展開を哲学史的に解明すること、以上の三点を目的とした。そのために、シャロンの主著である『知恵について』の内容分析をもとに、シャロンとデカルトの著作で用いられている主要な概念について、その対応関係と位置情報を示すべく、テキストを網羅的に配列させたコンコーダンスを作成した。とりわけ、情念、習慣/習俗、権威、宗教、動物、懐疑の諸論点について強い連関が確認された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was three fold: 1) to elucidate how Descartes received and transformed Charron's thoughts on anthropology (which could be considered from a political or moral point of view); 2) to show how Charron's anthropological thoughts could be intrinsically analyzed and then characterized in the history of French philosophy, by comparing those thoughts with the Cartesian critical reception of them; 3) to take a general view of the development of anthropological thoughts in the history of early French philosophy. For this purpose, a concordance was compiled to arrange a large number of important concepts, to list all related citations from the Cartesian corpus and Charron's main book ("De la sagesse"), and to show the intertextuality between them especially on these subjects: passions, habits/customs, authority, religion, animals and doubt.

研究分野：西洋近世哲学史

キーワード：デカルト シャロン モンテーニュ 人間学 ストア主義

1. 研究開始当初の背景

名著『知恵について (*De la sagesse*)』で名高いシャロン (1541年-1603年) の哲学的思索、ならびにそのテキストにおいて僅かながらもシャロンに言及するデカルト (1596年-1650年) の哲学的思索を比較する専門的研究は、1954年という早い時期にこの主題に関心を示していた、近世懐疑主義研究で著名な R. Popkin の論文 *Charron and Descartes: the Fruits of Systematic Doubt* を唯一の例外とすれば、2000年代に実質的に開始されたフランス哲学研究の新領域である。

その先行研究として、英語圏からは、Popkin の衣鉢を継ぐ J. R. Maia Neto の論文 *Charron's Epochè and Descartes's Cogito* (2003年)、仏語圏からは、今日のデカルト研究を強力に牽引する D. Kambouchner の論文 *Descartes et Charron: prud'homie, générosité et charité* (2008年) がそれぞれ挙げられるが、主要なものはこの二点に限られる。

先行研究の些少さは、シャロン哲学に関する専門的研究がその本場フランスでさえ依然として不十分であることから理解される。シャロンを主題にフランス国内で執筆された博士論文は現在のところ四点のみであり (博士論文データベース Sudoc 参照)、17世紀フランス哲学研究で著名な J. Lafond を指導教官に 1992年にトゥール大学に提出された Ch. Belin の *L'œuvre de Pierre Charron* をもって嚆矢とする。

この博士論文は 1995年に H. Champion 社から刊行されたが、これをもって本格的なシャロン研究の実質的な幕開けとみなすなら、それ以前に日本でシャロン研究に取り組み、その成果をおもに日本語で発表してきた斎藤広信氏 (日本女子大学) と葉狩隆夫氏 (上智大学) の孤独な営為は特筆に値する。しかし、日本フランス語フランス文学会の学会誌に掲載された論文 *Pierre Charron et François Garasse* (1996年) に結着をみる葉狩氏の研究、ならびに斎藤氏の研究において、シャロンとデカルトに関する哲学史的観点からの比較対照が遂行されることはなかった。

2. 研究の目的

本研究は上述の学術的背景のもと、シャロンとデカルトの比較対照を具体的かつ網羅的に展開することを目指すものであった。その際に着目された主題は、人間 (*anthropos*) に関する考察のすべてを意味する《人間学 (*anthropologie*)》であった。そして、この主題に関して [1] デカルトによるシャロン哲学の受容と変更の機構を《哲学史的解釈学》として解明し、[2] その批判的受容を基点にシャロン哲学のフランス哲学史における意義を剔抉すると同時に、[3] シャロンからデカルトにかけてフランス哲学黎明期における人間学的考察の展開を哲学史的

に解明すること、以上の三点を目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、《資料の作成》と《解釈の提示》を具体的な作業方法とした。

《資料の作成》にあたり、1601年刊行の『知恵について』初版と 1604年刊行の第二版の異同に注意しつつ、シャロンとデカルトの著作で用いられている主要な概念と問題論について、その有機的な対応関係と具体的な位置情報を示すべく、テキストを網羅的に配列させたコンコーダンスの作成を第一の研究方法とした。デカルトによるシャロン哲学の受容と修正を効果的に解明するために最も有効な方法と判断されたからである。

その際に注意されたのは、コンコーダンスの見出し項目をいかに選定するか、ということであった。そこで、見出し項目をひらがな順で列挙すること (たとえば、「愛」「意志」「運命」... というように) はしないという方法をとった。そのような配列をした場合、それぞれの見出し項目を結びつける概念的・問題論的な相互関連が見失われるからである。むしろ本研究では、複数の見出し項目を内包するような大きな主題を幾つか設定し、それに応じてシャロンとデカルトのテキスト上の対応関係を有機的なしかたでまとめることで、両者の間テキスト的な関連を示すことを方法上の注意事項とした。

ところで、コンコーダンスにおける複数の見出し項目を内包する主題をいかに選定するかという資料作成上の課題は、本研究の考察対象である人間学をどのような視点から捉えるかという解釈提示上の課題と不可分であると考えられた。そこで本研究では、《政治論的人間学》と《道徳論的人間学》という二つの大きな主題を設定した。そのうえで、それぞれにおいて固有なしかたで論じられる問いを導きだし、これに解釈上の考察を加えることにした。これが本研究における第二の研究方法である。

4. 研究成果

本研究の第一の目的については、以下の成果をあげることができた。

まず、《政治論的人間学》においては、*politique* という語が既成の学問分野としての政治学ではなくて、人間の共同体——その典型が政治体 (*polis, civitas, cité*) ——に関する考察と言説を指示する限りで、人間はいかなる他者といかなる種類の外的関係をいかなる手段で取り結ぶのかという問いが論じられることを、シャロンとデカルトの著作において確認した。そのうえで《動物》、《想像力》、《習慣 *coutume*/習俗 *mœurs*》、《権威》、《宗教》、《改革》などの諸論点について、両者の間テキスト性を解明する作業を所与の条件下でおこなった。

それに対して《道徳論的人間学》では、人間は自己といかなる種類の内在的関係をいかなる手段で取り結ぶのかという問いが論じられることを確認した。そのうえで、《知恵》、《情念》、《心身関係》、《徳／悪徳》、《(主体の自己に対する)教育》、《即自／対自》、《判断力》などの諸論点について、両者の間テキスト性を解明する作業をおこなった。

以上の作業の成果をうけて、シャロンとデカルトのあいだには以下の諸論点について、《哲学史的解釈学》の実行可能性をほぼ確実に指摘しうるものが明らかになった。すなわち、[1] いわゆるデカルトの「暫定的道徳」の成立過程におけるシャロンの人間学的考察の批判的活用(とりわけ《習慣／習俗》、《権威》、《宗教》について)、[2] 『知恵について』と初期デカルトの未完著『思索私記』における問題論的対応、[3] 古代懐疑主義の受容、批判、および新体系構築のための活用、[4] デカルトの『方法序説』第一部における自伝的叙述におけるシャロン人間学の批判的活用、[5] デカルト道徳論の枢要概念である「高邁」とシャロン道徳論の枢要概念である *prud'homie* の類似点と相違点、[6] 《道徳論的人間学》のうち《(主体の自己に対する)教育》の諸問題(とりわけ読書の効用について)、[7] 道徳論的人間学のうち《情念》の諸問題(とりわけ好奇心の使用について)、[8] 《政治論的人間学》のうち《動物》をめぐる諸問題、以上である。

なお、《政治論的人間学》と《道徳論的人間学》を構成する諸論点として具体的に前記したものうち、前段落で言及されていないものについて確定的なことを論定するためには、さらなる研究が必要であることが判明した。しかし、少なくともシャロンを触媒とすることでデカルト哲学を重層的かつ多角的に捉えることが可能になった。たとえばガラス神父(1585年-1631年)に代表されるイエズス会士の批判により従来の哲学史研究において不当に評価され、かつ、研究者によって文学的な価値しか有さないと判断されてきたシャロン哲学を再評価すること、ならびに、中世・スコラ哲学という参照軸に偏重してきた従来のデカルト哲学の生成史研究を修正すること、この二点に一定のしかたで寄与しうるものが判明したのである。これが本研究の成果が国内外の西洋哲学史研究に対して有するインパクトである。

とはいえ、本研究の第二の目的については、上述のようにシャロン哲学の再評価の端緒を掴むことはできたが、それはあくまでもデカルト哲学との関連においてであり、シャロン哲学に内在的なしかたでその特徴を剔抉することは叶わなかった。つまり、上述した *Belin* の *L'œuvre de Pierre Charron* を超える研究成果を出すことはできなかったのである。その最大の理由は、邦訳されていない『知恵について』が校訂版で900頁近くあり、近代フランス語の形成期にあたるフランス語で

執筆されているため、解読に予想以上の時間を要したからである。全体像を詳細に掴むまでに至っていないのが現状である。

本研究の第三の目的についても、やはり十分に達成することはできなかった。なぜなら、シャロン(じつはモンテーニュ(1533年-1592年)の思想的影響をかなり強く被っていることが研究の過程で判明した)からデカルトにかけてフランス哲学黎明期における人間学的考察の展開を哲学史的に解明するには、本研究課題の枠組みには収まらない非常に大きな問題が横たわっていることに研究の過程で気付かれたからである。つまり、彼らにとっての共通の対話者であった古代ストア主義の16世紀ヨーロッパにおける復興の具体を解明することが不可欠ではないか、との見通しが得られたのである。

したがって本研究は、なるほど当初の目的の一部を達成することはできなかったが、しかしその反省のもとに、モンテーニュ、シャロン、そしてデカルトは人間学という主題に関する限りで古代ストア主義をいかに受容し、修正し、そして当該期に特徴的な人間学の新体系構築のために活用したのか、という問いの解明を新たな研究課題として設定することができた。新たな研究課題を発掘しえた限りで、一定の意義があったものと自己総括している。以下では、この研究課題の発展の方向性を簡潔に示しておく。

16世紀ヨーロッパにおいて復興した古代ストア主義の哲学者は主として、セネカ、エピクテトス、マルクス＝アウレリウスであったが、最も関心を集めたのはセネカであった。したがって今後の研究では、16世紀後半から17世紀前半のヨーロッパにおけるセネカ哲学の受容と修正の具体を解明することが一つの選択肢として目指されるだろう。古代ストア主義に関する書籍の当時の出版状況から判断できることは、フランスの知識人がこれに最も強い関心を示したのは1590年代から1640年代までであり、それ以前については、1515年から始まる準備期間として、そして、それ以後については、古代ストア主義への関心が薄れていく過程として捉えることができる。このように描出された時代背景のもとに、「新ストア主義」という思潮の準備期間からモンテーニュを、その最盛期前半からシャロンを、そしてシャロンに代表される「キリスト教的ストア主義」に対する応答として、その最盛期後半からデカルトをそれぞれ選出することで、フランス哲学黎明期における主としてセネカ哲学の受容、批判、および新体系構築のための活用を分析することを目指すのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

①Yoshinori Tsuzaki, "La curiosité chez Descartes, lecteur de Charron," in *La curiosità e le passioni della conoscenza: da Montaigne a Hobbes*, ed. by Gianni Paganini, Roma: Accademia Nazionale dei Lincei, 2017 (査読有/原稿提出済み、2017年未刊行予定/ページ数未定).

②Yoshinori Tsuzaki, "De l'usage sénéquien des livres chez Montaigne, Charron et Descartes," in *Studies in Philosophy* (『哲学・思想論集』), University of Tsukuba Doctoral Program in Philosophy (筑波大学哲学・思想専攻), n° 41, 2015, pp. 79-86 (査読有).

③津崎良典「書物という世界、世界という書物——モンテーニュとデカルトとの読書論に関する哲学史的解釈学の試み」、筑波大学哲学・思想専攻『哲学・思想論集』所収、第39号、85 - 108頁、2014年(査読無).

④津崎良典「近世フランス哲学における充足の感情に関する哲学史的解釈学の試み」、筑波大学哲学・思想学会『哲学・思想論叢』所収、第32号、62 - 74頁、2014年(査読有).

⑤津崎良典「デカルトとイエズス会における人文主義教育思想」、日仏哲学会『フランス哲学・思想研究』所収、第18号、121 - 130頁、2013年(査読有).

[学会発表] (計2件)

①Yoshinori Tsuzaki, "Le problème de la curiosité de Charron à Descartes," *La curiosità e le passioni della conoscenza. Filosofia e scienze da Montaigne a Hobbes*, colloque international organisé par Gianni Paganini (2015年10月7-8日、アッカデーミア・デイ・リンチェイ (ローマ (イタリア))).

②Yoshinori Tsuzaki, "De l'usage sénéquien des livres chez Montaigne, Charron et Descartes," *Descartes et ses contemporains*, journée d'étude franco-japonaise organisée par Hiroki Takeda (2014年10月13日、大阪国際会議場 (大阪府・大阪市)).

[図書] (計1件)

①大西克智、津崎良典、三浦伸夫、武田裕紀、中澤聡、石田隆太、鈴木泉、『デカルト全書簡集』第四巻、知泉書館、2015年、407p.

6. 研究組織

(1)研究代表者

津崎 良典 (TSUZAKI, Yoshinori)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10624661